

「地域振興 ～六次産業化のその先へ～」

「俺は父親として、子供たちを守る義務がある！」

父は決意したのです。

当時父は東京の大企業で働く典型的なサラリーマンでした。毎月一定の給料がもらえ、毎週一定の休日がありました。その生活は単調ですが、安定していました。

そんな彼には生まれつき体の弱い二人の息子がいました。息子のため父が下した決断は、おそらく並大抵の人には真似できないものでした。父は、私と弟のため、脱サラし北海道で農業をする道を選んだのです！子供たちに本当に安心なものを食べさせる。親の使命を果たそうと、父はこれまでの安定した生活を捨てることを決意したのです！

父は、自らの決断に誇りを持っています。そして、私はそんな父を誇りに重い、感謝しています。北海道での生活がもたらした、父親の愛情と、そして地域の中での温かな繋がりは、私を壮健な青年に育ててくれたからです。

しかし父は、ある時から私にしきりにこう言うようになりました。

「お前は、ここで生きていかないほうがいい」

疲弊しきった農村。徐々に年老いていく住人達。彼は息子がそこで生きていく、その歯がゆさを感じたのでしょうか。

地元を愛し、常に協力し合い、ぬくもりにあふれる人々ばかりの私の地元。しかし一方で、人口減少が進み、将来的には消滅する可能性すら見えてきた私の地元。

「農業に未来はない。農村からは出ろ」

彼は、彼が誇りをもって選んだ道を、私に選ぶな、というのです。

農村という地域社会があります。そこで暮らす人々は昔から互いに協力し生活を営んできました。地域社会はそこに住む人々によってそれぞれ固有の価値観や文化が作られています。その価値観・文化を共有し、強く結び付きあうことで、住民は安心を得られていたのです。

しかし、地方圏から都市圏への人口移動が進む現在、農村地域では約 5000 の集落が無人化、2 万の集落が限界集落となっています。そして 2050 年、全国の、なんと半数の自治体が消滅してしまうのです！そしてそのほとんどが私の地元も含む農村です。農村から人が消え、土地は荒れ、そしていつしか忘れ去られる。この状況で農業が生き残るでしょうか？農村で住民は絆を守っていけるのでしょうか？断じて否であります！

農村の衰退に伴い、農業はどういった現状にあるのでしょうか。食料自給率は四割に満たず、農業産出額は最盛期の 12 兆円から 30%以上下落しました。離農者はこの 20 年で 100 万人を超え、耕作放棄地も 19 万ヘクタールから 39 万ヘクタールにまで増えました。そして高齢化と後継者不足で、農業従事者のうち 65 歳以上の高齢者は実に 52%、50 歳以上を

含めると 87%にもなります。このように農業は絶望的な状況をたどっているのです！

なぜ農村から人口が減り続けるのでしょうか？なぜ農業は衰退し続けるのでしょうか？地方での暮らしを求める若者は都市圏に 3 割以上いて、そのうちの 7 割もの人が農業に興味を持っていると答えています。なぜ彼らは地方に移住し、農業をしないのでしょうか？

端的に言います。農業は儲からないからです。サラリーマンの平均年収が 400 万円なのに対し、農家の平均年収は 348 万円。しかも農家に休みはなく、機械や農薬などで経費が掛かり、さらに自然の条件によっては収入が大幅に減るリスクもあります。

内閣府の調査で「地方に移住したい」と答えた若者になぜ実際に移住しないかと質問すると 7 割近くは安定した生活が営める仕事がないからと答えました。農地は大量に余り、空き家は各地にあります。農業は始めようと思えば誰でも始められる状況です。しかし彼らにとって農家は選択肢にありません。農業は儲からないからです。言い方を変えましょう。負担の割に、リスクの割に、得られる儲けは、より安定した生活を送る他の職業に劣るからです。

つまり、農業を儲かる産業にすれば、地方への移住を希望する若者の 7 割が抱く不安、安定した収入源の不足を解消し、彼らは農村に移住できるのです！

農業をより安定した儲けられる産業にすることで若者は自然と集まってゆきます。レタス栽培が主産業である長野県川上村は、農家一戸当たりの平均年収は約 2500 万円となっています。多くの若者が東京など都市圏から集まり、現在では村の全農家のうち 7 割が 50 歳未満の人々となっています。

農業は絶対に儲からないわけではありません。しかし乗り越えねばならない障壁はあまりに大きいのです。そしてそれこそが今日の農業衰退・農村衰退をもたらした原因と言えるのです。

一つ目の原因は補助金を始めとした農業政策の不備にあります。現在、農業に対する支援は災害や売れ残り分の補てんが中心となっています。一方、合計して 2000 万円に上る土地や農業機械の購入に関する補助金はほとんどなく、借金に頼らざるを得ません。そのため、新規就農者や野心ある農家は自らの思いをかなえるため、大きなリスクを背負わねばならないのです。また、現在多くの農村では、農協が用水路や農道の管理、流通業務など一つの農家で行うことが困難な役割を農家に替わって行なっています。しかしながら、農協は運営のために、農家から利益の 4 割を手数料として受け取るか、農家に資金の貸出しを行ってその利息を得る形になっているため、結果的に農家の収入を奪ってしまう形となっているのです。このように現状の農業政策では農家が収入を増やすことが出来ないのです。

二つ目の原因は外国製品との競争です。日本の農産物は世界的にも高価格で、大豆やトウモロコシはアメリカの 2 倍、牛肉はオーストラリアの 3 倍、生鮮野菜は中国の実に 5 倍も高く、高い関税を設けてもその差は埋めがたいのです。日本の農産物は確かに安心・安

全という評価を得ていますが、これだけの価格差があると消費者は国産農産物を買うことに躊躇し、事実、外食産業では国産農産物の使用は 3 割ほどしかありません。また近年国産農産物の輸出が政策として進められていますが、価格の高さから売り上げが伸びず、農業全体で輸出額は 3700 億円に留まっており、農業活性化にはとても十分とは言えません。面積が狭く大規模化が難しいうえ、人件費の高い日本では、外国産農産物と価格で勝負するのは不可能なのです。そのため、流通の効率化で価格を出来るだけ小さくしたうえで、高品質であるという信頼を消費者から得られるということが重要です。

以上二つの障壁を突破し、儲かる農業を実現するために訴える政策は二つ！

一つ目は農協を中心としたエコノミックガーデニング政策の導入です。エコノミックガーデニング政策とは、地域にもとからある企業の産業振興計画を国・自治体が精査したうえでアドバイスをを行い、計画に不足している資金・人材・情報・インフラ等は無償で提供する政策のことです。アメリカコロラド州で雇用と経済成長率を 20 年で倍増させたこの政策は、外資への依存ではなく地元企業の成長により地域活性化を図るため、持続的な地域経済を作ることが出来ます。この政策を、農村に密着し、地域の風土や経済状況を理解しているだけでなく、全国のマーケットに関する知識も持つ農協が担うようにします。これにより、新規投資に関して農家は適切なアドバイスを受けたうえで、必要な資金を得ることが出来ます。またその際、農協は農家からではなく、国からその運営費を得ることとします。国が、その地域の売上高に応じ補助金を与えるシステムとし、農協を、農家からお金を取ることなく運営できるようにするのです。この政策で、農業で収入を増やす基盤が出来るのです。

二つ目の政策は、六次産業化と、農村への短期滞在の推進です。六次産業化とは、生産・加工・流通を一つの農場が一貫して行うことでコストを下げると同時に、その農産物の特性を活かした商品化によって、ブランド価値を高めていくというものです。これを一点目の政策で推進していきます。現状もう行われていると皆さまは思うでしょう。しかしそれらは地域全体を潤すものにはなっていません。六次産業化と同時に地域は移住増加に向け、若者が一度その地域に足を運んでもらえるような政策をここでは提案します。その方法とは、農村への短期滞在ツアーで実際に商品製造の場を見てもらい、さらに農作業や自然体験などをしてもらうことで、都市とは違う農村のライフスタイルや価値観を発信し、人々をひきつけるというものです。三重県伊賀市のある農場はこの方法で、年間 50 万人が来訪し、約 50 億円の利益をたたき出すという成功を収めました。さらに 1000 人分もの雇用を生み、全国から若者の就職希望者が殺到しています。実際に訪れてもらうことで、商品に対する信頼を上げ、その土地にも愛着を持ってもらうようにしたのです。このように現在の六次産業化に現地ですべて実際に体験してもらい、都会と違う価値観を発信することで、ブランド力向上だけでなく、移住増加にもつながるのです。

これらの政策で農村は若者であふれ、活性化し、農業は生活を保つことができる仕事へ

と変わるのです。

農業は、自然を相手に格闘し、外国製品とのし烈な競争を勝ち抜かねばならない、過酷な産業です。

私は、父に聞いたことがあります。なぜそんなに苦勞してまで、農業を続けるのかと。父はこう答えました。

「笑顔だよ。お前たちの笑顔と、地域の人々の笑顔と、それから、この野菜を食べる人の笑顔だ」

収穫の季節、地域に溢れる充実した笑顔。父もまた、その中で笑顔になる農家の一人です。その瞬間のために、毎日働き続けるのです。

しかし、やりがいだけでは人は生きていけません。農業への愛だけでは、生活は営めません。彼らの情熱が、やりがいが、そしてその温かみを享受する私たち農村の住民が、農業をただ愛していけるように、彼らのやりがいが安定した生活に直結するように、六次産業のその先へ、農業の、農村の生き残る道を探ろうではありませんか！

ご清聴ありがとうございました。